友好都市コーナー

新渡戸友好都市　岩手県　花巻市

光太郎の心を感じてみませんか

毎年5月15日、まぶしい新緑に包まれる高村山荘（花巻市太田）では「高村祭」が開かれます。

詩人で彫刻家の高村光太郎は、太平洋戦争の激化に伴い、昭和20年のこの日、東京から花巻へ疎開。以来、7年間の農耕自炊生活の中で、詩集「典型」など多くの素晴しい作品を世に送り出しました。光太郎が花巻へ疎開した日を記念して開かれ、今年で50回を数える「高村祭」。皆さんも足を運んで、当時と変わらぬ風景の中で、偉大な先人・高村光太郎の心にふれてみませんか。

とき　5月15日(火)
午前10時～午後2時

ところ　高村山荘

問い合わせ先
高村記念会
（総合花巻病院内
☎0198㉓3311）

新渡戸友好都市とは

十和田市開拓の祖である新渡戸傳は、岩手県花巻市で生まれ、62歳のとき盛岡藩から三本木原開拓を許可され、人工河川工事に着手し、4年後に約11キロメートルの水路（稲生川）を完成させました。その新渡戸家の歴史的な結びつきや、お互いの面積・人口・産業構造などがよく似ていることなどから、平成元年10月10日に「新渡戸友好都市」の提携を結びました。

桂月の文学碑を訪ねて⑬

「さく花に　青葉まじりて
春夏を　ひとときに見る
みちのくの山」

蔦川渓流砂防公園（中流）の案内碑の中に、歌とともに水芭蕉の絵と水芭蕉についての漢文調の解説文、「花蕋黄。唯一本。花瓣白。唯一片。」が刻まれています。これは、「蔦温泉帖」から桂月自筆の書と絵を転写拡大したものです。

蔦温泉滞在中、桂月は紙きれに走り書きしたものを、茶の間での夕飯時などに持参していたのを見て、蔦温泉旅館の女将が「先生、それではもったいないですよ」と、和紙で手帳を作って差し上げたそうです。その手帳を手にした桂月は、蔦温泉に完成した薬師堂に奉納することを決めて、自分の書きためた和歌の中から書き写して作られたのが「蔦温泉帖」です。黒と朱の2色で書かれている絵は、ユーモラスなものもみられ、桂月の隠れた一面を知ることができる貴重な遺作となっています。

「蔦温泉帖」は、大正12年10月からの越冬滞在の際に作られています。

また、桂月は翌年にも冬籠りをし、同じように「冬籠帖」を作り薬師堂に奉納しています。

桂月の楽款が入っている「蔦温泉帖」（右）と「冬籠帳」（左）

問い合わせ先
総務課（☎㉓5111内線156）